

「同じように分け隔てなく」

#障がいがあるから助けるのではなく #同じように分け隔てなく接する #公平で公正な社会をつくる
 #何ら変わらない仲間という意識 #一緒に行動したり一緒に遊んだりすることが大事
 #意識を変えてそれを表現していく #自分が活躍できる社会 #人々の意識や社会を変える力
 #パラリンピックが盛り上がるほどみんなの距離も縮まっていく

学校名	千葉市立稲毛高等学校附属中学校
実施教科	夏期講座
授業担当者	後藤洋平先生(体育科)
授業時間	50分×2回
実施対象	中学3年生(2クラス 79名)
授業のねらい	共生社会の実現に欠かせないものの見方や考え方を理解し、未来に継承していくために、今後自分にどのようなことができるのかを考える。
使用ユニット	東京 2020 パラリンピックのレガシーについて考えてみよう
活用方法	夏期講座の中で、本来1授業(50分)で予定されている指導案を2時間かけて丁寧に扱った。
生徒のコメント	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「障がいのある方に自分達が手を差し伸べて協力してあげるとするのは大事だけれど、でも逆に障がいがあるから助けるとか、障がいを理由にそういう関わりをするのではなくて、公平で公正な社会を作っていきたいんだったら、むしろみんな平等に同じように分け隔てなく接して、障がいの有無に関わらず困っている人がいたら手を差し伸べるし、悲しいことがあったら一緒に話して笑いたいし、そういうことを感じたので、私はこれまでもこれからも、どんな人にも分け隔てなく接していきたいなと思います。」 ・ 「(人混みの中にいる車いすユーザーの状況を疑似体験し)ほんの少しの身長差しかないのに、心で感じるものが大きかった。なんか阻まれているという感じがしたし、孤独を感じました。」 ・ 「何か困った時に相手の立場に立ち、相手の気持ちを考えることで共生社会の実現に近づいていけたらと思いました。」 ・ 「子どもとか、高齢者とか、女性男性とか、障がいがある方ない方とか、そういうのを合わせた政治の話をしている政治家に頑張してほしいと思ったし、そういう風に頑張っている人を応援したいと思いました。」
先生コメント	共生社会のテーマは、正直難しいかもしれないという懸念もあったので、いかに噛み砕いて伝えるかに気をつけて授業を行なった。動画の中のパラリンピアンへのコメントは、生徒の心に直接響いたようだった。アクティビティを通して人混みの中で車椅子に座っている人の目線や視界、周りのみんなが立った状態の中にぽつんと座っている気持ちを感じる考えたことで、その後グループで話し合いながら学びを人権意識を深めることができた。生徒達から出てきたまとめの言葉や感想は、予想以上に質の高いものばかりで、どんなふうにも共生社会を作っていったらいいのか、それぞれがイメージを抱くことができたように思う。「障害だけでなく、子どもや高齢者、色々な人たちがそれぞれが同じように分け隔てなく暮らしやすい社会を目指すべき」という言葉が出てきたのは、授業者として嬉しい限りだった。
その他	1時間の授業を行った後、パラ水泳の鈴木孝幸選手の講演を聞く機会を設けた。鈴木選手の講演を聞いた上で、振り返りの時間を設け、共生社会を実現するためにできることを考えさせた。



疑似体験：人混みの中にある車いすユーザーの状況



ディスカッションの様子